

2005年12月20日

人間科学研究科長 殿

北村 毅氏 博士学位申請論文審査報告書

北村毅氏の学位申請論文の予備審査を2005年12月19日に終了しましたので、ここにその結果をご報告いたします。

記

1. 申請者氏名 北村 毅

2. 論文題名 沖縄戦 後のエスノグラフィ
(副題名 痕跡と記憶の戦跡空間)

3. 博士申請論文の評価
本論文の目的と特色

本論文は、沖縄戦の《戦跡》に着目しつつ、その記憶が戦後日本の《平和のイマジネール》というマスター・ナラティヴにおいて、はたしてどのように表象されてきたかを、現地調査と文献調査、さらに多くの証言とに基づいて問おうとするものである。社会的・文化的想像力としてのイマジネールによって構築された犠牲＝平和＝繁栄というトリアド、すなわち戦死者の犠牲が、戦後の平和と繁栄をもたらしたという論理のなかで、戦跡はいかにしてナショナリズムに、そして受難（パッション）と熱情（パッション）とを共有するコンパッションの共同体に組み込まれていったか。沖縄戦に関してはこれまで数多くの考察がなされてきているが、本論文の特色は、戦争そのものではなく、戦後の《沖縄》がどのようにして構築されていったかを検証するだけでなく、戦死者の残余としての《痕跡》がいかにして脱沖縄化していったかを、戦跡のモニュメント化や各種の実践、組織、観光などから、多岐にわたって分析するところにある。

本論文の構成

沖縄戦後を巡るこうした大きな問いと対峙するための手続きとして、本論文の序章「死者の戦後」では、まず《戦跡》を単なる戦場跡や戦争遺跡ではなく、遺骨収集やモニュメントの建立、慰霊祭、戦死者供養、戦跡巡礼・観光、戦争

の語りといった《痕跡》などを通して、生者が死者に実践的に関わる場と定義する。そこから本論文は、これまでの先行的な沖縄研究を通観し、そのほとんどが沖縄戦という境域のなかに囲い込まれている、つまり《ゲッター化》している状況を指摘する。戦死者がいかなる戦後を送ってきたか。本論文はそこにこだわる。

さらに、集合的アイデンティティの核となる記憶を創造するイマジネールのなかで、《殉国》や《防波堤》、《平和／国の礎》、そして何よりも《国家のための犠牲》といったレトリックが、日本の戦後を語る言説として定説化してきた過程を追う。次いで著者は、沖縄戦最大の悲劇の舞台となった摩文仁の丘（糸満市）が、1972年の日本復帰に伴う「沖縄復帰特別措置法（以下略）」によって、沖縄戦跡国定公園に指定され、英霊の慰霊と自然景観保護を目的とする平和祈念公園として霊域化されていく過程に目を向ける。そして、戦後50周年を記念してここに平和の礎なるモニュメントが建設されるに及んで、摩文仁はさながら《平和の巡礼者》が訪れる《平和のメッカ》へ姿を変えていったという。

第1部の「痕跡の戦跡景観」では、摩文仁における戦跡景観の変貌が、戦後まもなくから1950年代までの3層に分けて論じられている。ここでとりわけ印象深いのは、自然洞窟であるガマや構築壕の中に、累々と積み重なった状態で放置ないし野ざらしにされていた遺骨の収集作業である。著者はあまりにも生々しく惨い遺骨のありようを、証言や当時の記録から見事に再現しているが、むろんガマの遺骨には、日本兵のみならず、日本兵の犠牲となった沖縄人のものもあった。

1952年以降、日本政府と琉球政府によって組織された遺骨収集団は、しかしそうした遺骨の惨状を認めようとせず、ナショナルな語りへと回収してしまう。無数の死者の痕跡が、殉国者や英霊、平和のための犠牲者ないし礎という言説に転位していくのである。著者はこうして収集された遺骨の数を1956年から2003年まで精査しているが、1956年から本格化した収集作業は、やがて拾骨から集骨へと変化し、60年代には各部落の慰霊塔　摩文仁のガマには魂魄之塔が建てられた　に収められていた遺骨が、那覇の戦没者中央納骨所へと集められるようになる。この転骨によって遺骨は土地と死の記憶に結びついた墓所を追われ、ひとりの死が、死者の尊厳のためという名目のもと、全体の死のなかに収斂されていく。著者はそれを遺骨の中央集権化と呼ぶ。

一方、霊域整備計画の一環としてさまざまな慰霊塔・碑が改修・新規建立されていくが、《悠久の大義》や《遺烈》、《英魂》といった言葉が刻まれたこれらのモニュメントで記念＝追悼されるのは、軍人が軍属、さらに「将兵並びに戦闘に協力散華せる多数の住民」であった。こうしてそこでは死者の記憶が改変され、一部の加害者（日本兵）と被害者（住民）とが、ともどもに本土防衛の盾

として顕彰されるようになる。その極端な事例が、牛島満司令官が古武士の式に倣って切腹したさまを象ったとされる黎明之塔などである。

国庫などからの援助金を得て、こうした慰霊塔（指定霊域）の管理にあたるようになったのが、靖国神社奉賛会の沖縄支部である沖縄戦没者慰霊奉賛会だった。靖国神社の地方版である護国神社同様、これらの霊域は《靖国の精神を体現する場》と位置づけられ、摩文仁の「靖国化」はさらに時を追うごとに進展していく。

だが、遺族たちの多くは国家による慰霊塔ではなく、なおも自分たちの慰霊塔を死者の墓所とするが、やがて摩文仁は、平和希求の象徴的な原点として、つまりマスター・ナラティブとしての平和のイマジネールを強化する、さまざまな国家的な行事のメイン会場へと確実に転位していくようになるという。

《痕跡を辿る人々》と題された第2部では、日本遺族会青年部の慰霊実践を事例として、平和のイマジネールが彼らのナショナルな共同性を編み上げる原理とどのように結びついたか、結びつけられたかが論じられる。ここで具体的な実践事例として取り上げられているのは、1962年から始まった前記青年部の平和祈願慰霊大行進と戦跡巡礼である。親会である日本遺族会は、こうした霊域巡礼を通して「亡き父」を顕在化させ、沖縄の遺族青年のみならず、本土から巡礼に参加した遺族青年たちにも、英霊精神や愛国心を啓蒙していった。その結果、遺児たちの「巡礼コミュニティ」が構築されるようになる。

戦跡巡礼の象徴的・社会的意味について、著者はフランスの民族学者ヴァン・ジェネップの通過儀礼論をもちいながら、分離＝移行＝再統合の3位相によって分析しているが、これらの巡礼実践とあわせて、平和大会も開かれ、毎回平和のアピールが決議された。1973年までのそこには親会の意向がつねに反映され、核実験や戦争反対のアピールとともに、靖国神社の国家護持が強く打ち出されるようになる。そして、それと軌を一にするかのように、遺児たちは自らのうちに父＝英霊としての血のイマジネールを内包し、それを継承することに自らのアイデンティティを据えていくようになったという。つまり、血族という《身体の原理》と平和の解釈学に由来する《魂の原理》が、遺児であらしめる、遺児であり続ける根拠になったというのである。こうして著者は、沖縄の戦跡が、遺児たちをして、英霊精神や愛国心に従属する主体として立ち上げる規律＝訓練の場へと過不足なく転位していったとする。

第3部の「痕跡を語る」では、ナショナルな語りのモードとして、バスガイドによる平和の言説が分析されている。1970年代初頭に始まる沖縄戦の記録運動は、それまでの軍を中心軸とする記録や語りを批判的にとらえ、沖縄住民を主体とするものだった。これを基礎的な資料として、旧日本軍による《勇戦敢闘》の戦跡を巡る《表通り観光コース》とは異なる、《裏通り》の戦跡ガイドが、

1980年代初めから、主に沖縄からの眼差しで実施されるようになる。

前者の戦跡観光では、戦死者が国家のためにいかにして死んでいったかという、すぐれてオーセンティックな《ナショナルな語り》が際限なく再生産され、それによって、慰霊巡礼団を中心とする観光客たちのニーズを満たそうとした。だが、平和ガイドと呼ばれる《裏通り》の《証言の語り》は、表通りの戦跡ではなく、かつて夥しい遺骨が放置されていたガマを主たる場として展開している。著者はその具体的事例として糸数市のアブチラガマに着目する。例年十数万の修学旅行生が訪れるこのガマの陰惨な出来事は、沖縄県平和祈念資料館の展示で再現されているが、著者によれば、《ガマという「沖縄の記憶」は、公共の記憶の中に容易に回収可能なひめゆりの「乙女たち」や特攻隊員の「殉国」物語とは対極に位置し、「日本国民」の戦争の記憶のノイズとして鳴り響いている》という。

この平和ガイドに奉仕する者は必ずしも沖縄出身者ではなく、その語りもマニュアルがあるわけではない。そこには沖縄戦体験者の証言が反映されているものの、ガイド役自体は《ガマの暗闇の中に埋没してしまっている暴力の痕跡辺接近を提示する、出来事と目撃者とを仲介する「他者の声」》だという。いわば、痕跡をして訪れる者に語らせるのである。

そして最後に、これまでの検証作業を締めくくるため、著者は提喩と換喩という言語学の理論モデルを援用し、前者を、死者が英霊として生者の《想像の共同体》(B・アンダーソン)へと組み込まれていく《ナショナルな語り》に、後者を、死者の痕跡が死者と生者を実践的に結びつける《証言の領域》ととらえる。こうしたメタ表象的な分析の先に、沖縄戦後研究に関わる新たな地平がみえてくるのではないか。著者はそれを期待する。

本論文の評価

以上、縷々紹介してきたように、本論文は「平和のイマジネール」がいかにして戦後の沖縄を構築してきたかを、基礎的な資料や証言、さらには文化人類学や社会学などの理論や解析図表なども随所に織り込みながら、まことに子細かつ慎重に論じている。ときに斬新かつ老獪なレトリックを駆使して紡ぎ出された硬質な文体も、見事のひとことである。それには著者のインテンシヴな現地調査が大いに寄与している点にいささかの疑いもないが、本論文は単に戦後日本の沖縄政策を批判するのではなく、何よりも沖縄戦後の記憶の表象が、歴史的・文化的・地政学的にいかに構築されてきたかの解明にある。本論文の真骨頂はまさにここにこそある。

本論文はさらに新たな知見を加えて学術書として刊行されるはずだが、その成果は斯界にとって瑞々しい戦慄となるはずである。その高度な内容と独創性、

将来性に鑑みつつ、下記審査委員会は本論文を学位論文として認めるものである。

4 . 北村毅氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授	博士(人間科学)(早稲田大学)	蔵持不三也
審査員	早稲田大学教授	博士(人間科学)(早稲田大学)	店田 廣文
審査員	早稲田大学教授	學術博士(筑波大学)	寒川 恒夫
審査員	早稲田大学教授		谷川 章雄
審査員	早稲田大学教授		勝方 = 稻福 惠子

以上